

トレンドに文句をつけない

新しいトレンドやファッションに文句をつけたがる人がいる。茶髪がはやれば茶髪に、だらしない着こなしがはやれば着こなしに、それこそ目をつりあげるようにして。

流行に敏感なのは若い世代の特徴であり、それを非難するのは年配世代の特徴であるのは、たぶん人類の法則のようなものだろう。ファッションの本質は、まさにスカート丈のようなもので、長いのに飽きたら短くし、短いのに飽きたら長くして、周期的に変化を楽しんでいるにすぎない。

往年の映画監督・小津安二郎はこう語った。「なんでもないことは流行に従う。重大なことは道徳に従う」。——さらに続けて「芸術のことは自分に従う」と。なんでもないこと、重大なこと、芸術のことと、対象を3つに分けて述べているところがおもしろい。

この人の考えでゆくと、流行のレベルのこと（＝なんでもないこと）に難癖をつけるのは、もしかしたらヒマ人だからかもしれない。

「重大なことは道徳に従う」とは、判断の基準を明確にしなければならぬときの態度で、これは流行をうんぬんするのと次元が異なる。人が真剣にこだわる必要があるのはこの領域のことだ。

さらに「芸術のこと」というのは、小津にとって「重大なこと」以上に重大な領域だった。自分の天職であり、一生をかけて追究するテーマそのものであった。ここでは「自分に従う」と、きっぱり言い切っている。

自分にとって大切な領域が明らかになれば、それ以外のことには寛容になれる。ひとつの道を極めようとしている人に共通して見られる姿勢ではないか。

人事コンサルタント 本田 有明

好きは好き、嫌いは嫌い

Aさん「日本人はもともと黒髪が似合うんだ。それをわざわざ茶色だの金色だのに染めたりするのはナンセンス。愚の骨頂だね」

Bさん「スカートを短くするのは男を挑発するようなもので、恥知らずの証だ。長いスカートをはいたほうがきれいに見える」

人それぞれに意見はあるだろう。が、議論するほどのことではない。Aさんは単に黒髪が好きだと言っているだけのこと。Bさんのほうも、自分は長いスカートの女性が好きだと言っているにすぎない。

かつて私が勤務した職場の先輩に、なにごとにつけ好みの激しい人がいた。無地の白以外のワイシャツは嫌い、関西弁の女性は嫌い、口数の多い男は大嫌いなど、「嫌い」のオンパレードで、しかもそれを人前で堂々と言うのだ。ダイバーシティ（＝多様性）が尊重される現代では一発退場となりそうな人である。

こういう人はふつう煙たがられるものだが、彼は例外だった。好き嫌いを口にしても憎まれない、ちょっと変わったところがあった。一種の人徳というべきか。理由はふたつ。

ひとつは「なぜ関西弁の女性が嫌いなんですか」と聞かれても、「好きは好き、嫌いは嫌いさ。理屈なんかないよ」と、あっさりしたものだったこと。もうひとつは、嫌いだという相手に対して、公平性を欠くような評価は決してしなかったこと。そういう人に対してこそ別の面をきちんと評価し、それについても人前で公言していた。

好き嫌いは誰にでもある。それによって人を差別しなければ大きな問題はないのだが、そこが至難の業。誰にでもできることではない。あなたはいかがだろうか。